

竹ヶ鼻廃寺遺跡V・VI

—個人住宅建設工事に伴う発掘調査—

平成22年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	第5次調査の成果	4
IV	第6次調査の成果	6

写真図版

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が平成21年度の国庫補助事業として実施した竹ヶ鼻廃寺遺跡の個人住宅建設に伴う事前発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本調査の調査地は、第5次調査が、彦根市竹ヶ鼻町地先に、第6次調査が、彦根市竹ヶ鼻町274-6・274-7・274-11に位置する。
3. 本調査は、第5次調査については、平成21年8月11日に、第6次調査については、平成21年10月5日～10月16日にそれぞれ現地調査を実施し、後に整理作業を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

文化財部長：松岡一男

課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦

副 主 査：北川恭子

主 任：高木絵美

主 任：林 昭男

技 師：戸塚洋輔

技 師：下高大輔

文化財部次長（兼文化財課長）：谷口 徹

史跡整備係長：志萱昌貢

主 任：辻 嘉光

主 任：池田隼人

技 師：三尾次郎

技 師：田中良輔

5. 本調査には以下の諸氏が参加した。

第6次：友田勇 山路弘行 田部健次郎 川上俊水 藤原輝雄

6. 本書は、Ⅲ章を三尾が執筆し、その他の執筆と編集を戸塚が行った。

7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

表1 竹ヶ鼻廃寺遺跡における発掘調査一覧

調査番号	調査時期	調査主体	主な遺構
1次	1983年12月～1984年3月	彦根市教育委員会	竪穴遺構・掘立柱建物跡
2次	1992年8月～1993年2月	彦根市教育委員会	竪穴遺構・掘立柱建物跡・土坑・溝
3次	1995年5月～1995年12月	彦根市教育委員会	竪穴遺構・掘立柱建物跡
4次	2008年10月～2009年1月	彦根市教育委員会	掘立柱建物跡・土坑・溝
5次	2009年8月	彦根市教育委員会	土坑・井戸
6次	2009年10月	彦根市教育委員会	土坑・水田

〔文献〕

- 彦根市教育委員会 1985 『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
彦根市教育委員会 1993 『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第21集
彦根市教育委員会 1996 『竹ヶ鼻廃寺発掘調査現地説明会資料』
彦根市教育委員会 2010 『竹ヶ鼻廃寺遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第45集
彦根市教育委員会 2010 『竹ヶ鼻廃寺遺跡第5次・第6次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第46集（本書）

歴史的環境 縄文時代の犬上川流域では、福満遺跡で前期の大歳山式土器が出土し、中期の様相は不明瞭であるが、中期末から晩期にかけては、福満遺跡を中心として集落が展開する。弥生時代前期・中期の遺跡の様相は不明瞭で、竹ヶ鼻廃寺遺跡で弥生時代前期の土器が出土している程度である。一方、左岸の妙楽寺遺跡では、弥生時代前期末から中期前半の集落が、川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が検出されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。

弥生時代後期には、福満遺跡、品井戸遺跡、対岸の堀南遺跡があり、その多くは扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と墓域がともに検出されており、弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されている。品井戸遺跡や堀南遺跡でも方形周溝墓が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、S字状口縁甕を含む庄内式併行期の土器が出土しており、北陸や濃尾平野とも強い関係をもっていたことが想定される。

古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長120mの前方後円墳で、大津市膳所茶臼山古墳と同形・同大とされる。膳所茶臼山古墳とともに、琵琶湖における水運の要として重要な役割を担っていたのであろう。

古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が営まれる。なお、福満遺跡の近くには、「椿塚」という藪があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わることから、古墳が存在した可能性が高い。

飛鳥時代には、犬上川流域の白鳳寺院として、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東には、畿内と東国を結ぶ交通路である東山道が位置していた。竹ヶ鼻廃寺遺跡では、白鳳時代から奈良時代の瓦が出土し、礎石の可能性のある石が近くの都恵神社に存在しており、白鳳時代から奈良時代の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、法土南遺跡において掘立柱建物跡が検出されている。竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設置され、円面硯や銅匙が出土しており、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では、石帯が出土しており、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたとされている。

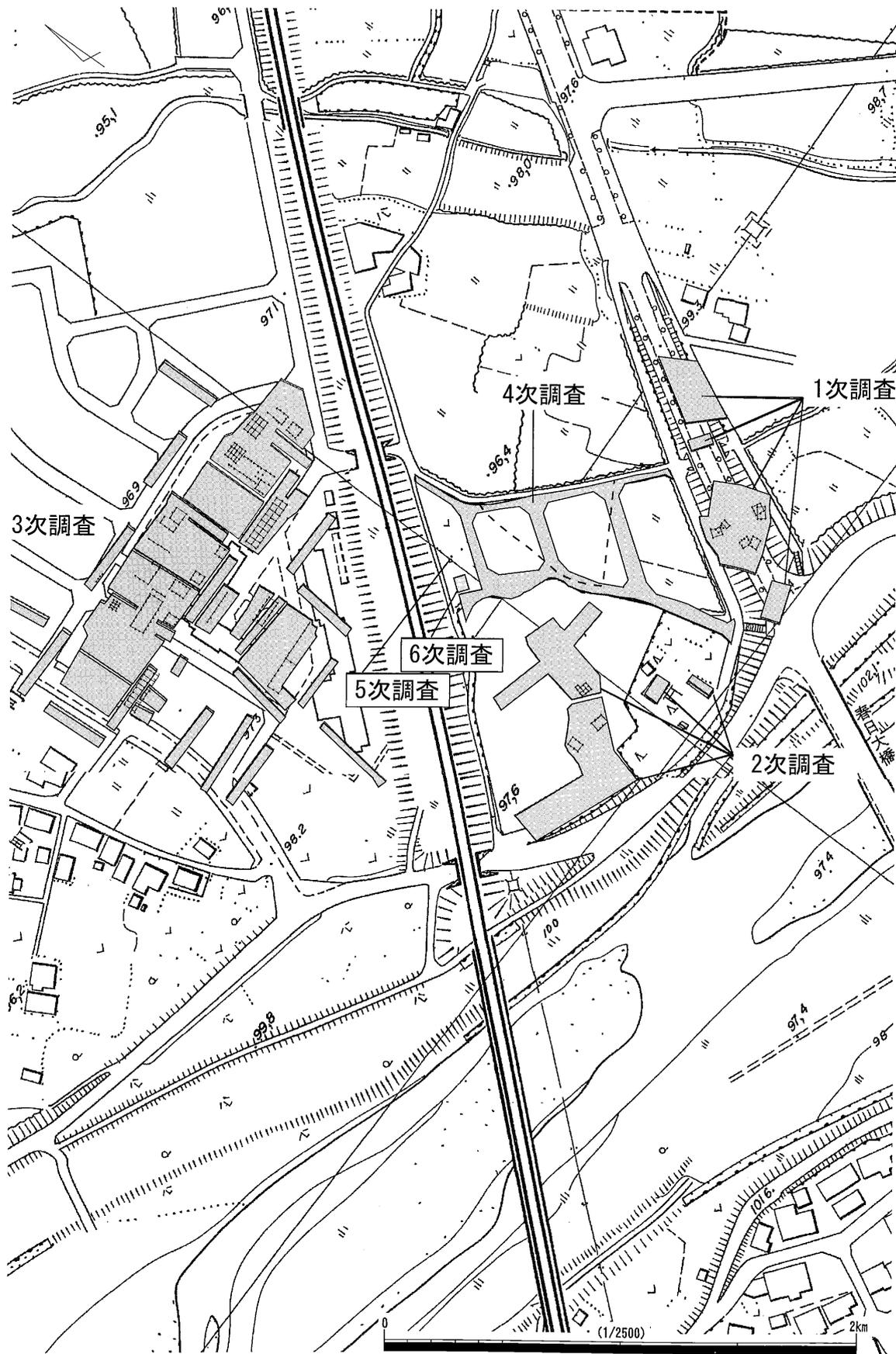


図2 竹ヶ鼻廃寺遺跡における発掘調査区の位置

Ⅲ 第5次調査の成果

1 はじめに

今回の調査地は、彦根市の中央部を西流する犬上川左岸に位置する竹ヶ鼻廃寺遺跡のほぼ中央に位置する。当遺跡については、過年度の4次の調査によって、古代寺院あるいは官衙と考えられる遺構が検出されており、平成10年には部分的にはあるが、市指定史跡に指定されているものである。特に、今回の申請箇所については平成20年度に宅地造成工事の届出に伴って試掘調査及び本調査を行っている。この際の本調査は宅地道路敷のみの調査であり宅地部分の調査は住宅建設時に行うというものであり、今回は当地において個人住宅建築に伴う届出が提出されたことにより本発掘調査を行った。調査は、地耐力の都合で部分的に地盤改良が必要となった建物北西角150cm四方を調査対象とした。

2 検出遺構

基本層序としては、上層から第1層：黄褐色砂礫層（造成土）、第2層：暗褐色粘質土、第3層：青灰色粘質土、第4層：暗灰黄色粘質土層、第5層：暗褐色粘土層、第6層：灰色粘土層、第7層：にぶい黄褐色粘質土層の順である。第6層上面を上層遺構面とし、第7層を下層遺構面とし、この二面において調査対象とした。

検出遺構としては、近世期の建物部材の廃棄土坑、素堀の井戸、中世段階の水田耕作面を検出した。遺構の時期としてはそれぞれの遺構で時期を判断できる遺物の出土が無かったために詳細については不明であるが、昨年度の調査によって近世の水田耕作土に近世遺物が含まれ、素堀の井戸についても近世遺物を伴った埋土が共通するものである。このことから、今回検出された遺構についても近世以降のものであると判断することとする。

第6層上面については、基本的に暗褐色粘土層であるものの、複数の耕作痕跡が確認され、この耕作痕跡に入り込む土質が灰色粘土であり、その下層の第7層とは異質のものである。この痕跡は、今回の5次調査の後に隣地で行われた6次調査でも畦畔とともに確認されており、中世前期の遺物を伴っていたことから、ここでは中世前期の水田耕作の痕跡と判断し報告することとする。

3 まとめ

今回の調査では、古代寺院及び官衙に関連するような遺構は検出されなかったが、当地の中世以降の土地利用のあり方について、復元的に考察していくための資料を得ることができた。とくに水田痕跡については、今回の調査対象地周辺で未だ確認できていない中世集落の存在を伺わせる良好な資料となった。

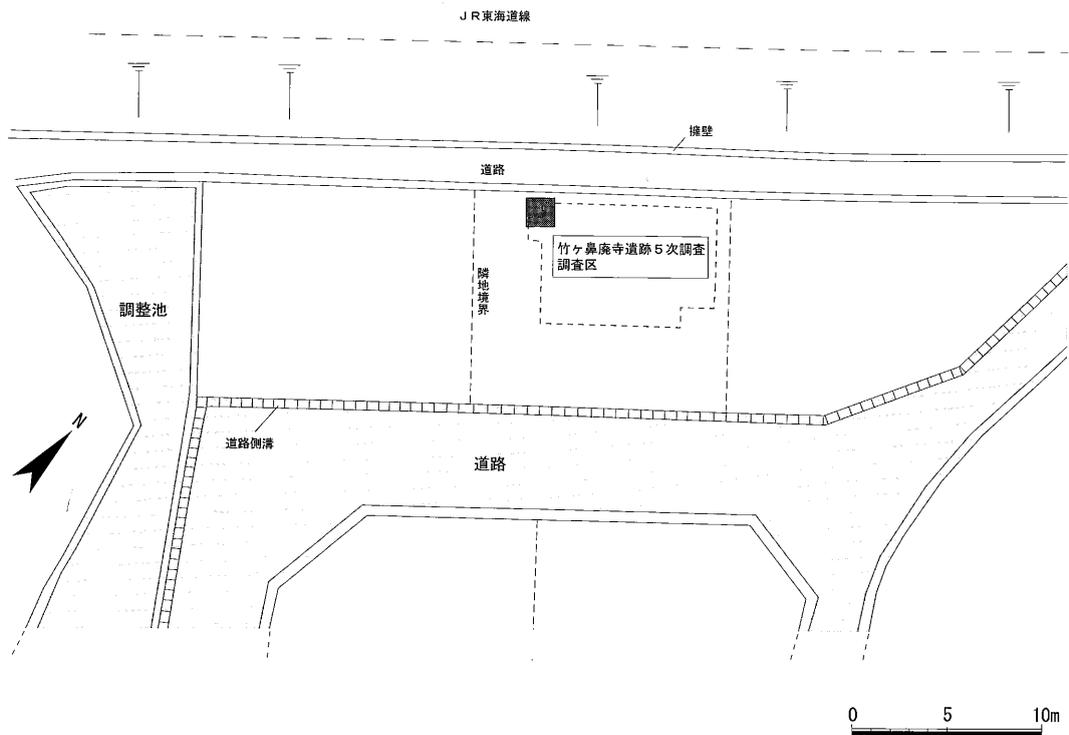


図3 第5次調査区の位置

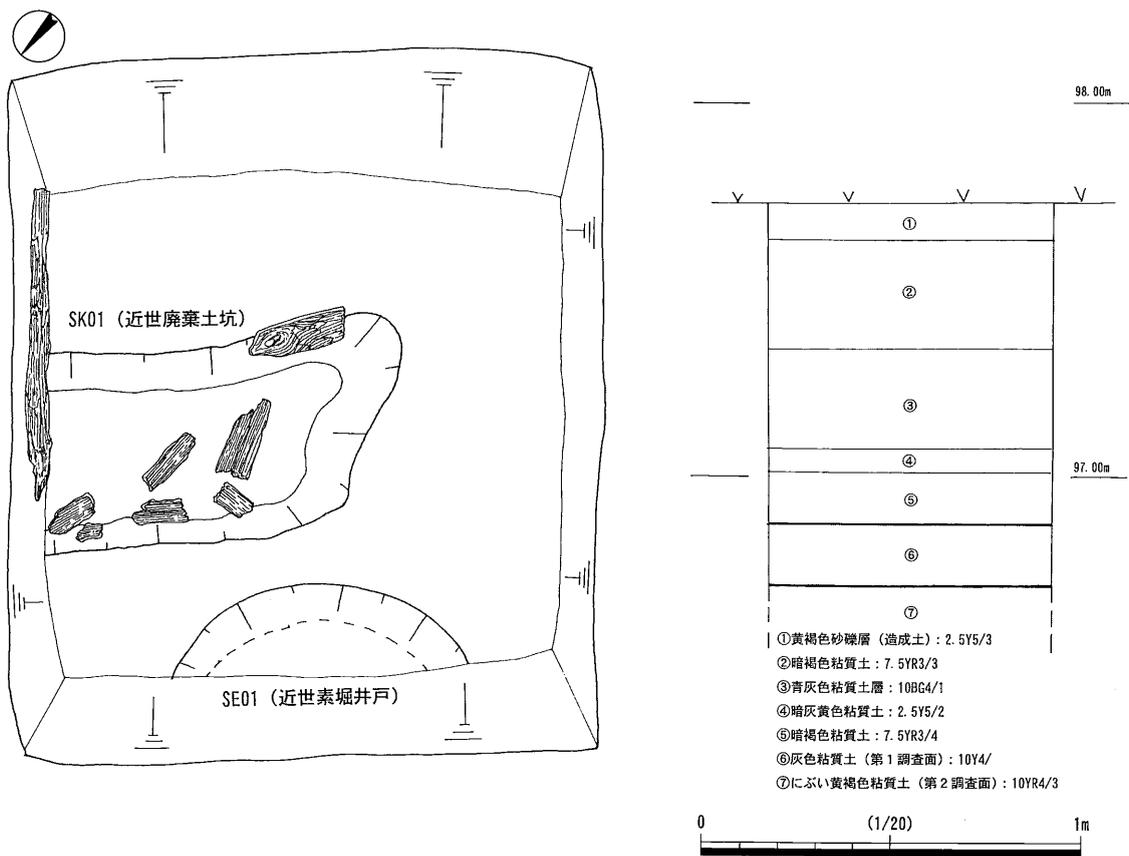


図4 第5次調査区全体図・土層柱状図

IV 第6次調査の成果

1 はじめに

住宅建設に伴う地盤改良の範囲にあわせて6.5m×5.4mの調査区を設定し、調査を行った。調査区の層序としては、表土には碎石を含む盛土があり、その下に灰色粘質土、青灰色粘質土の近現代の水田耕作土とこれに伴う黄褐色粘質土の床土がみられる。これらの中には、近世以降に堆積したとみられる青灰色砂質土、中世の整地層であると考えられる暗褐色粘質土、古代末から中世の耕作土と考えられる灰色粘質土が認められる。遺構面は、その下の黄褐色土の基盤層である。

2 検出遺構

検出した遺構は、土坑SK01、小穴SP01、水田とこれに伴う畦畔などである。

小穴SP01（図7）SK01にきられており、径24cmを測る。7世紀の須恵器杯が出土しており、奈良時代にさかのぼる遺構である可能性が高い。

土坑SK01（図7）長径1.6m以上、短径1.3m以上を測る。平安時代の灰釉陶器、白鳳時代の軒丸瓦片、平瓦片が出土した。遺構の時期は、平安時代であると推定できる。

水田・畦畔（図6）基盤面では、調査区南隅で畦畔が検出され、これより北側には植物の根及び耕作による攪拌がみられた。水の滞留していた耕作土とみられる灰色粘質土もこれに伴うため、水田として利用されていたものと考えられる。この畦畔は、正南北地

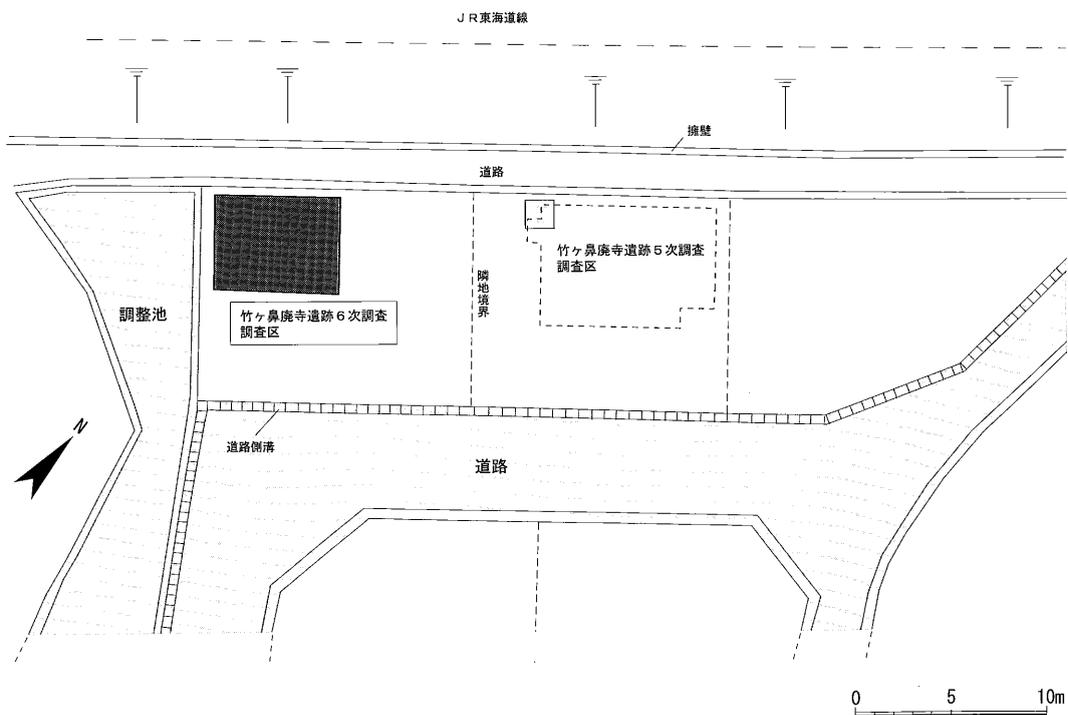
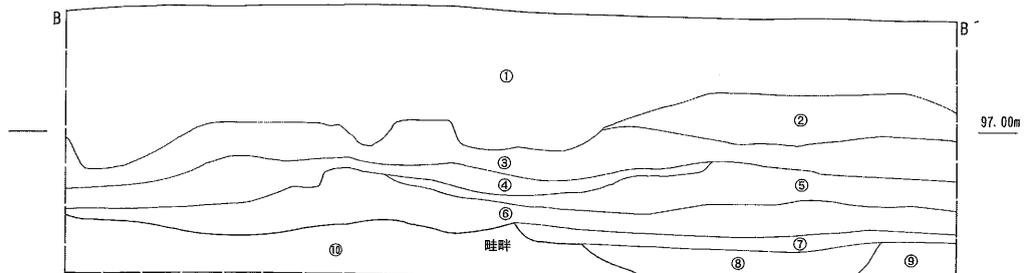
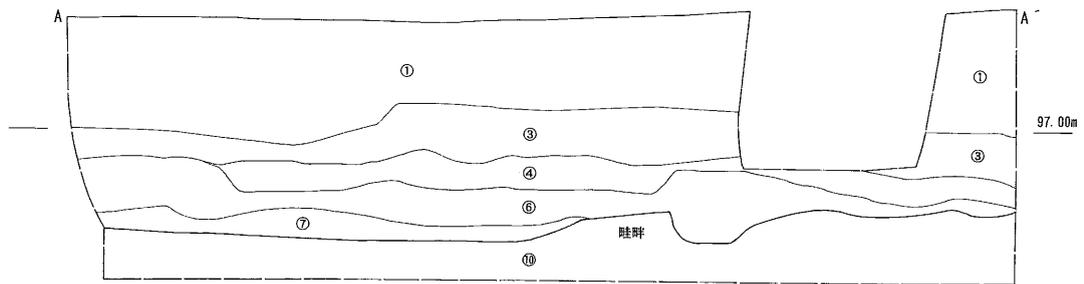
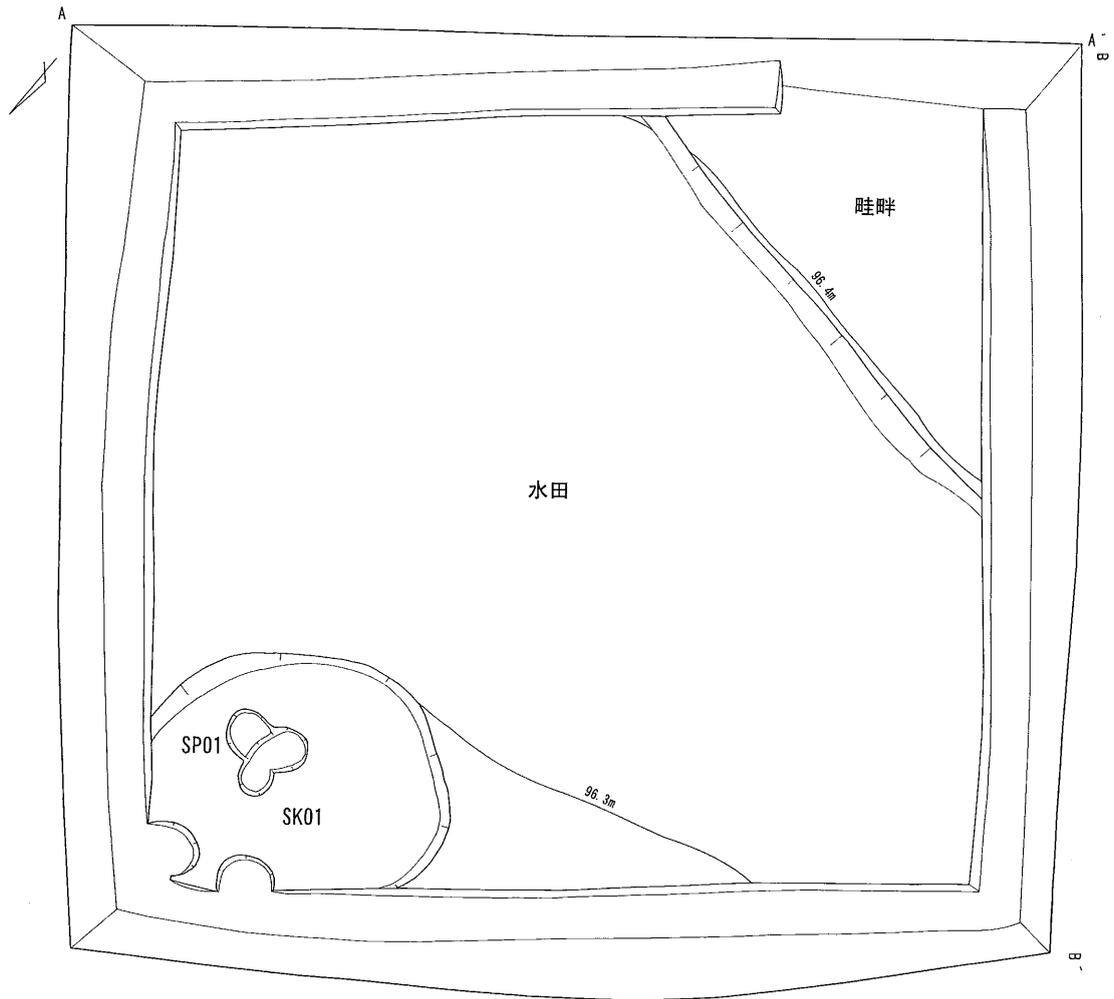


図5 第6次調査区の位置



- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| ①暗褐色土 近現代造成土 7.5YR3/3 | ⑥暗褐色粘質土 平安~鎌倉時代整地土 7.5YR3/4 |
| ②灰色粘質土 近現代水田耕作土 N4/ | ⑦灰色粘質土 平安時代以降水田耕作土 10Y4/ |
| ③青灰色粘質土 近現代水田耕作土 10B6/1 | ⑧灰色粘質土 平安時代以前遺構 10Y5/ |
| ④黄褐色粘質土 近現代水田床土 2.5Y5/4 | ⑨暗褐色粘質土 平安時代以前遺構 10YR3/3 |
| ⑤暗青灰色砂質土 近世以降堆積土 10B6/1 | ⑩黄褐色粘質土 基盤層 10YR5/6 |

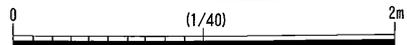


図6 第6次調査区全体図・土層断面図

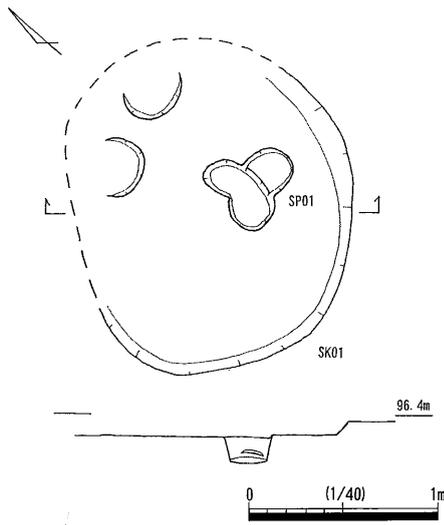


図7 SK01・SP01実測図

割である。調査区壁面の土層観察では、灰色粘質土の耕作土の下から掘り込まれた遺構が確認され、これらの遺構の埋土とSK01の埋土の特徴は近似し、ほぼ同時期であると考えられる。よって、これらの遺構は、出土土器から、平安時代の遺構であると推定できる。また、これらの遺構の上に耕作土とみられる灰色粘質土が堆積しているため、水田として利用されていたのは、平安時代以降である可能性が高い。また、耕作土上の整地層（6層）からは、混入品とみられる白鳳時代の瓦とともに山茶碗が出土しており、整地層（6層）は、平安時代あるいは、鎌倉時代以降に堆積したものであろう。

3 出土遺物

図8は、各遺構と整地層から出土した土器である。図8の1は、SP01から出土した須恵器杯身である。褐灰色を呈し、復元値で底径4.8cmである。7世紀代のもので、遺構の時期を示すものと考えられる。

図8の2は、SK01から出土した9世紀の灰釉陶器碗である。褐灰色を呈し、復元値で口径14cmである。薄手で、口縁部の外反をとどめるものである。

図8の3は、整地層（6層）から出土した山茶碗である。灰白色を呈し、復元値で口径12cmである。薄手のもので、口縁部は外反せず、13～14世紀代の東濃型とみられる。

図9は、整地層（6層）から出土した北宋銭である。淡緑色を呈し、径2.45cm、縁の厚さ0.12cmを測る。表面、裏面ともに摩滅が著しい。祥符通寶であり、中国における初鑄年代は、1008年である。6層から出土しており、平安時代あるいは、鎌倉時代に位置するものであろう。

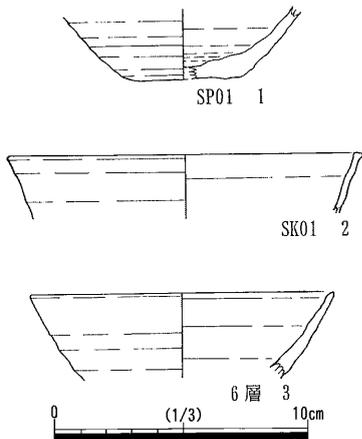


図8 出土遺物実測図

図10・11・12は、SK01から出土した図10の6を除き、すべて整地層（6層）に混入して出土した瓦である。瓦片は、6層からコンテナ2箱分出土したが、残存状態の良好な資料を抽出して報告する。

5は、複弁の蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の一部のみ残存する。凸面から凹面にかけて、ナデ調整が施される。軟質で、黄灰色を呈し、焼成が良好ではない。

6は、外縁に重圈文をもつ軒丸瓦である。凸面から凹面にかけて、ナデ調整が施される。軟質で、褐灰色を呈し、焼成は良好ではない。

7～14は、平瓦である。7は、凸面には斜格子叩き目圧痕を残し、部分的にナデ調整が施される。凹面には布目圧痕がわずかに残り、ナデ調整が施されている。軟質で、黄灰色を呈し、焼成は良好ではない。

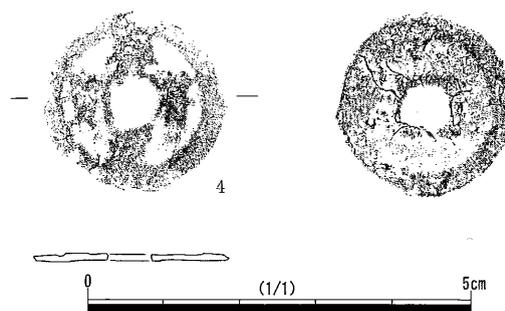


図9 整地層出土「祥符通寶」

8は、凸面には正格子あるいは、斜格子目の叩き圧痕が残る。ナデ調整が入念になされ、叩き目はわずかに残存する。凹面には布目圧痕が残る、ナデ調整は施されていない。側面は3面あり、ケズリが施される。中央の面が広く、その両端の面は狭く丸みをもつ。1回ケズリであろう。硬質で、灰色を呈する。

9は、凸面がヘラナデの後にナデ調整が施され、凹面には布目圧痕が残る。側面には2面あり、2回にわけてケズリが施されている。軟質で、灰色を呈する。

10は、凸面に縄目叩き目圧痕が残る、凹面に布目圧痕が残る、さらにナデ調整が施される。側面は1面で、1回でケズリ調整が施される。軟質で、灰色を呈する。

11は、凸面には縄目叩き目圧痕が残る。凹面には布目圧痕が残る、さらにヘラナデ調整が施される。側面は1面で、1回でケズリ調整が施される。軟質で、黄灰色を呈する。

12は、凸面には平行叩き目圧痕が残る。凹面には布目圧痕が残る、さらにナデ調整が施される。端面には、ケズリ調整が施される。軟質で、黄灰色を呈する。

13は、凸面にはヘラナデの後、ナデ調整が施される。凹面には布目圧痕が残る、さらにナデ調整が施される。側面は1面で、1回ケズリであろう。端面も同様に1面で、1回でケズリ調整が施される。硬質で、灰色を呈する。

14は、凸面にはナデ調整が施され、凹面には布目圧痕が残る、さらにナデ調整が施される。端面は1面で、1回でケズリ調整が施される。凹面の端部に自然釉がわずかに付着する。硬質で、灰色を呈する。

15は、丸瓦である。凸面には、縄目叩き目圧痕が残る。さらにナデ調整が施される。凹面には布目圧痕が残る。側面は2面あり、2回にわけてケズリ調整が施される。軟質で、黄灰色を呈する。

以上、第6次調査で出土した軒丸瓦、平瓦、丸瓦について述べた。軒丸瓦では、複弁蓮華文軒丸瓦と重圈文縁をもつ軒丸瓦が出土している点に注目できる。過去の調査で出土した軒丸瓦としては、山田寺式、川原寺式、湖東式、藤原宮式あるいは本薬師寺式などが知られている（谷口1992、彦根市教育委員会1985・1993）。破片資料のため、図10

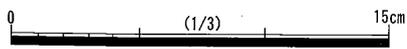
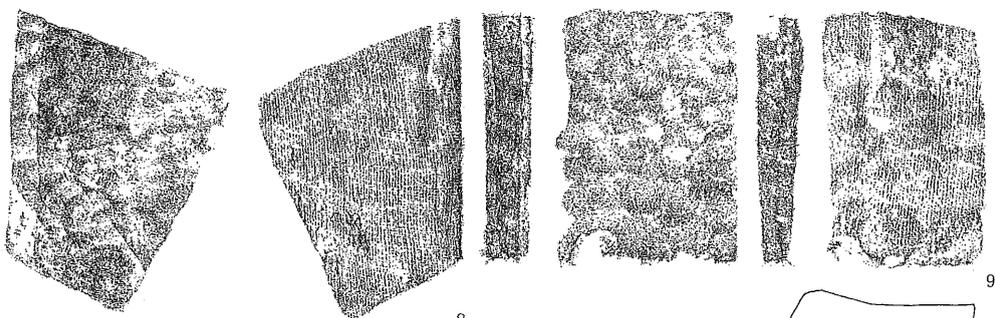
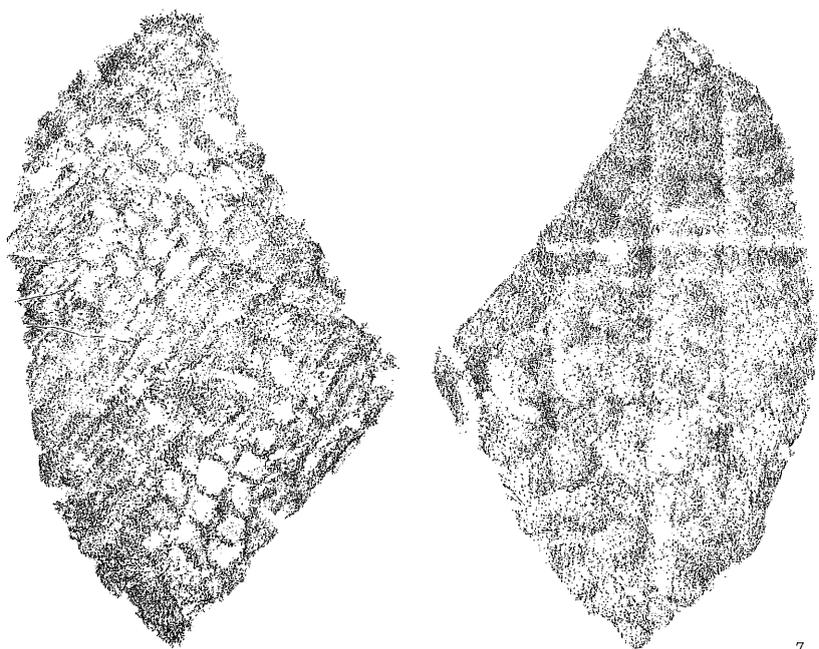
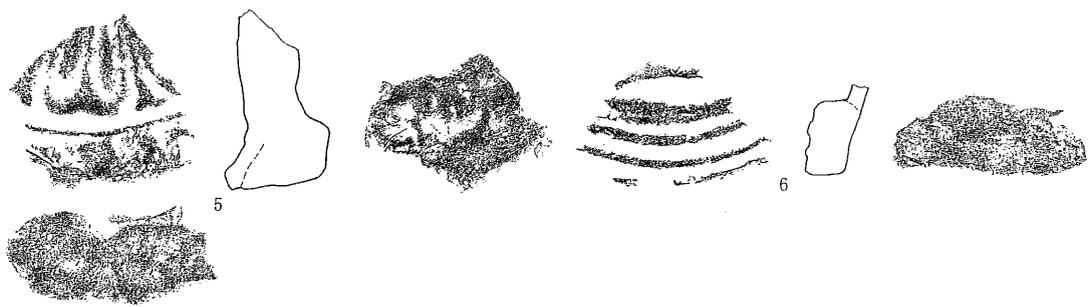
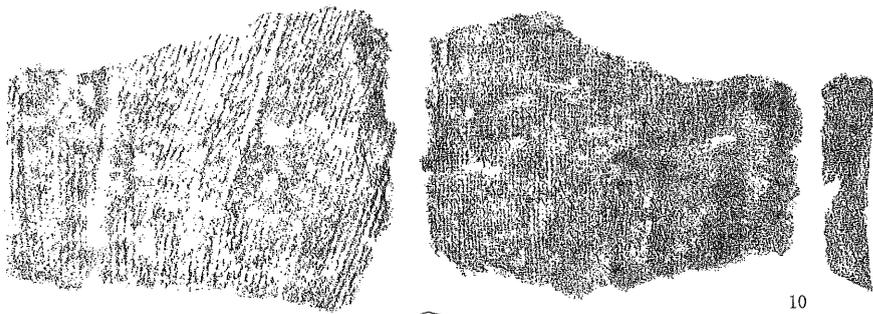
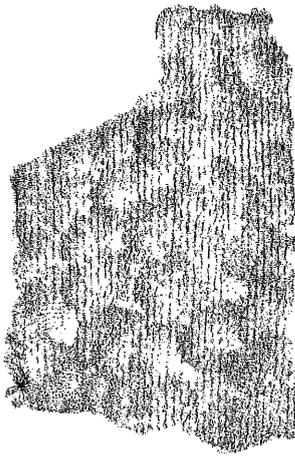


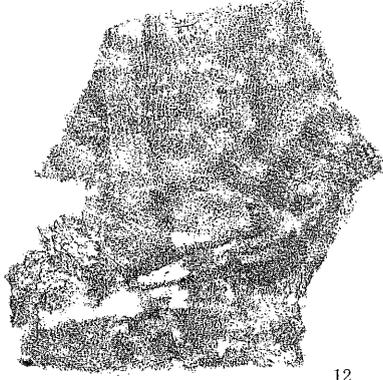
图10 出土瓦実測图 (1)



10



11



12

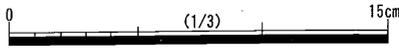
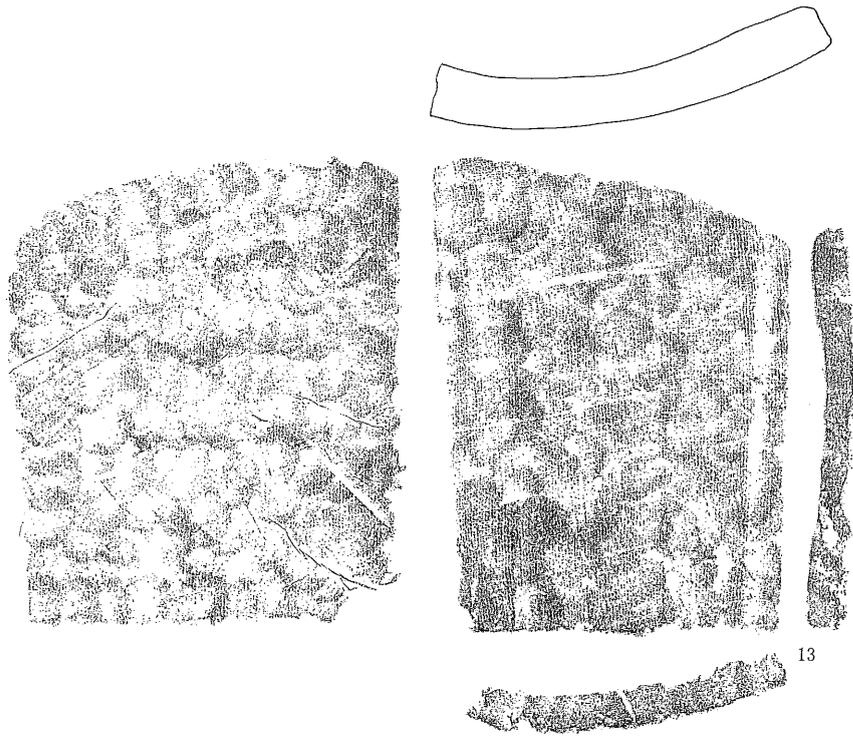
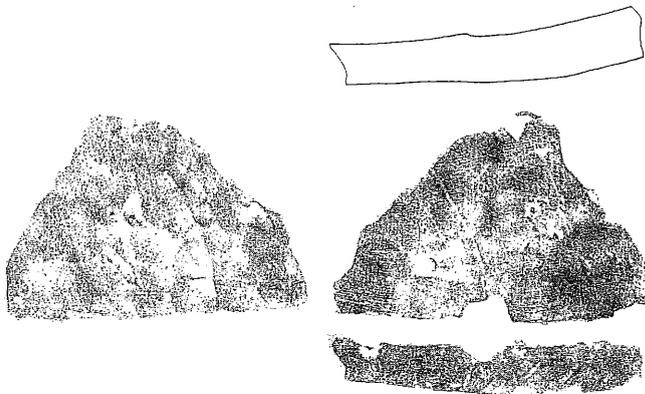


图11 出土瓦実測图 (2)



13



14



15

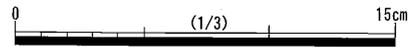


图12 出土瓦実測图 (3)

の5の詳細は不明であるが、図10の6は、特徴的な重圏文縁をもち、山田寺式に位置する可能性がある。平瓦をみると、凸面の調整では、斜格子目叩き、縄目叩き、平行叩き、ナデ調整のみの個体があり、凹面調整では、いずれも布目圧痕がみられるが、ナデ調整を行わないものと、部分的にナデ調整を施すものがある。端部の削りについても、別方向からの複数回のケズリを想定できるものと、1回で削られるものがある。平瓦のうちの大半は、桶巻き作りによるものであろう。焼成については、灰色を呈し、比較的焼成状況が良好で、硬く焼きしまったものと、黄灰色や灰色で、焼成が良好ではなく、軟質のものがみられる。厚さでは、厚手と薄手の二種があり、厚手のものは焼成が良好でなく、軟質であり、一方、薄手のものは焼成が良好で、硬質である。第6次調査出土瓦の大半は、共伴した軒丸瓦の特徴から、7世紀代に位置するものと考えられる。

4 まとめ

第6次調査では、正南北地割である平安時代末以降の水田が検出された。白鳳時代の地割が踏襲されたと考えられ、あらためて竹ヶ鼻廃寺遺跡における正南北地割の存在を追認できる。耕作土が、奈良時代から平安時代の遺構の上に堆積していることが確認されたため、耕作土の上に堆積し、白鳳時代から奈良時代の瓦を多く含む整地層は、平安時代、あるいは鎌倉時代に位置するものと考えられる。従来、寺院が廃絶すると、大規模な整地が行われ、その後、官衙関連の倉庫群とみられる掘立柱建物群が構築されたものと考えられていた。今回の調査により、平安時代以前の遺構、平安時代末以降の水田、平安時代あるいは鎌倉時代の整地層の先後関係がわかり、周辺に水田を営んだ中世集落が存在する可能性の高いことが判明した。ただし、整地層の時期や整地状況は、遺跡内において一様ではない可能性があり、今後も注意を要する。6次調査区から北側のJR東海道線の範囲にかけては、白鳳時代の遺構の状況は不明であるが、平安時代末以降には、白鳳時代の地割りをを用いた耕作地が展開していたのであろう。

一方、JR東海道線の敷地やその南側においては、塔跡、金堂跡などは検出されていないが、中枢部の伽藍が展開していたと想定されている（高橋2007）。この範囲においても、平安時代以降の整地により、白鳳時代から奈良時代の遺構が削平を受けているものと予想されるが、今後、周辺地域の調査により、中枢部の位置を特定していく必要がある。

参考文献

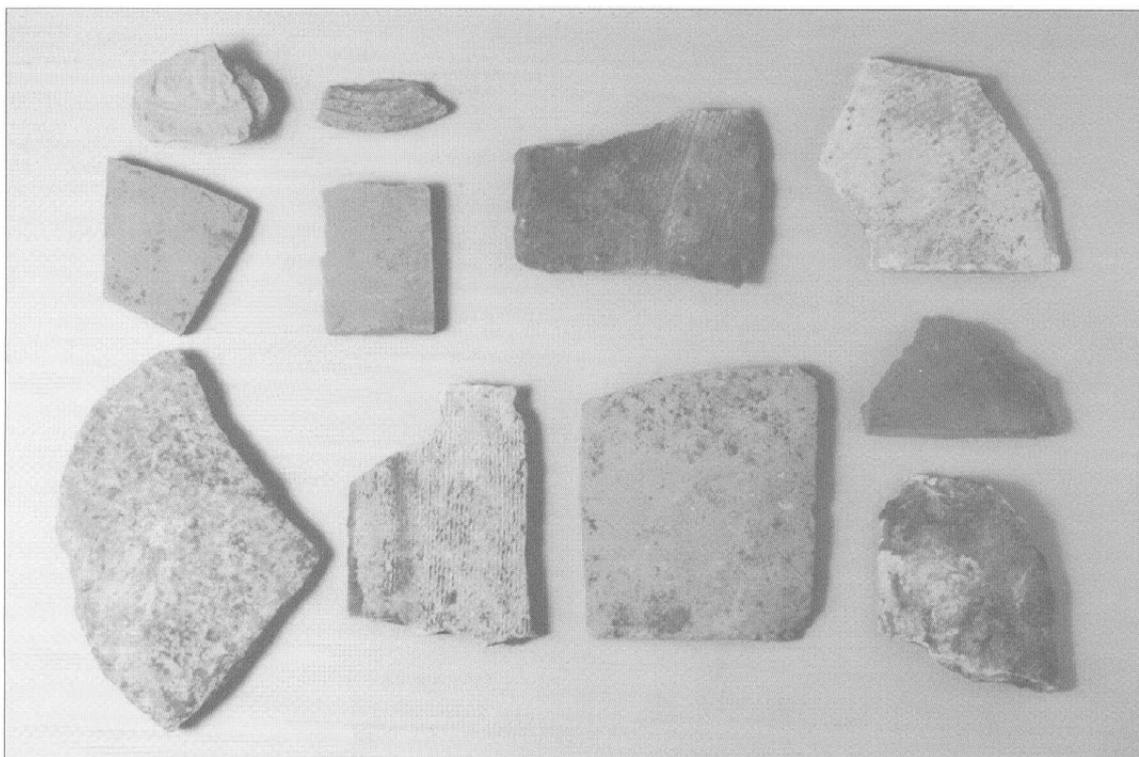
- 高橋美久二 2007「律令国家と近江」『新修彦根市史 第1巻通史編古代・中世』彦根市
谷口 徹 1992「彦根の古代寺院(1)」『彦根城博物館研究紀要』第3号 彦根城博物館
彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡(第4次)』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
彦根市教育委員会 1993『竹ヶ鼻廃寺遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第21集



1 第5次調査区第1遺構面 南から



2 第6次調査区全景 北から



1 第6次調査出土瓦



2 第6次調査出土瓦

平成21年度 彦根市発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	種類	調査日	調査面積(m ²)	調査原因	主な遺構	主な出土遺物	主な時代	調査の種類	費用負担
1-1	佐和山城跡	古沢町	城跡	平成21年12月7日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助16
1-2				平成21年6月23日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助06
1-3		松原町		平成22年2月3日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助21
1-4		古沢町		平成22年2月4日	12	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助22
1-5		古沢町		平成22年2月22日	12	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助23
2-2	特別史跡彦根城跡	金亀町	城跡	平成21年10月26日～ 平成22年1月4日	64	史跡整備	舟入	陶磁器・瓦	近世	本調査	国庫補助 (石垣整備)
2-3				平成21年11月25日～ 平成22年3月19日	48	史跡整備	石垣他	陶磁器・瓦	近世	本調査	国庫補助 (石垣整備)
3	一ツヤ遺跡	平田町	散布地	平成21年9月24日	12	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助11
4-1	木戸口遺跡	平田町	散布地	平成21年8月27日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助10
4-2				平成21年12月24日	4	本堂改修	なし	なし	なし	試掘	国庫補助18
5	須川遺跡	西今町	散布地	平成21年7月29日	4	その他開発	なし	なし	なし	試掘	国庫補助07
6-1	福満遺跡	小泉町	集落跡	平成21年4月30日	4	分譲住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助03
6-2				平成21年12月18日	4	住宅兼工場 店舗	なし	なし	なし	試掘	国庫補助19
7	西今遺跡	西今町	散布地	平成21年10月15日 平成21年10月21日	84	宅地造成	なし	なし	なし	試掘	国庫補助13
8-1	竹ヶ鼻廃寺遺跡	竹ヶ鼻町	集落跡	平成21年8月11日	2.5	個人住宅	水田跡	なし	中世前期	本調査	国庫補助09
8-2			集落跡	平成21年10月5日～ 平成21年10月16日	35	個人住宅	水田跡・ 土坑	須恵器・瓦他	平安～ 中世前期	本調査	国庫補助12
9-1	道ノ下遺跡	東沼波町	散布地	平成21年8月3日	4	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助08
9-2				平成22年2月4日	20	宅地造成	なし	なし	なし	試掘	国庫補助20
10-1	丁田遺跡	高宮町	集落跡	平成21年11月27日	72	宅地造成	竪穴遺構・ 土坑他	土師器・ 須恵器他	弥生～ 中世	試掘	国庫補助14
10-2				平成21年12月21日～ 平成22年2月28日	1296	宅地造成	竪穴遺構・ 土坑他	土師器・ 須恵器他	縄文～ 中世	本調査	原因者
10-3				平成21年12月17日	12	宅地造成	なし	なし	なし	試掘	国庫補助17
11-1	川瀬馬場遺跡	川瀬馬場町	集落跡	平成21年5月26日	20	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助04
11-2				平成21年7月21日～ 平成21年8月31日	400	集合住宅	柱穴・溝他	弥生土器	弥生時代	本調査	原因者
12	極楽寺遺跡	川瀬馬場町	集落跡	平成21年4月17日	16	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助01
13	田原遺跡	田原町	散布地	平成22年2月25日	4	その他開発	なし	なし	なし	試掘	国庫補助24
14	金田遺跡	金田町	集落跡	平成21年12月3日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助15
15-1	名勝玄宮楽々園	金亀町	庭園	平成21年12月14日～ 平成22年3月9日	170	史跡整備	石組護岸・ 州浜他	陶磁器・瓦	近世	本調査	国庫補助(名 勝保存整備)
15-2				平成21年12月21日～ 平成22年1月25日	16	史跡整備	飛梁溪木橋	なし	近世	本調査	国庫補助(名 勝保存整備)
16	尾末山岩遺跡	尾末町	城跡	平成21年9月18日～ 平成21年12月16日	105	市指定文化 財保存整備	長屋門跡	陶磁器・瓦	近世	本調査	国庫補助(歴史 まちづくり法)
17	大堀城跡	大堀町	城跡	平成21年4月22日	12	集合住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助02
18	甘露城跡	甘呂町	城跡	平成21年6月11日	4	個人住宅	なし	なし	なし	試掘	国庫補助05

報告書抄録

ふりがな	たけがはなはいじいせき5・6								
書名	竹ヶ鼻廃寺遺跡V・VI								
副書名	個人住宅建設工事に伴う発掘調査								
巻次									
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	46								
編著者名	三尾次郎 戸塚洋輔								
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課								
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833								
発行年月日	20100331								
しょしゅういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		世界測地系		調査 面積	調査期間	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経				
たけがはなはいじいせき 竹ヶ鼻廃寺遺跡	ひこねし 彦根市	25202	139	5 次	35°	136°	2.25㎡	2009 0811	個人住宅 建設
	たけがはなちよ 竹ヶ鼻町				24′	24′			
	274-6				24″	45″			
	274-7			6 次	35°	136°	35㎡	20091005 ～ 20091016	
	274-11				24′	24′			
	他				20″	15″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
竹ヶ鼻廃寺 遺跡	集落	奈良 平安 江戸	土坑 水田 井戸	瓦 須恵器 古銭他					

彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集

竹ヶ鼻廃寺遺跡V・VI

—個人住宅建設工事に伴う発掘調査—

平成22年（2010年）3月発行

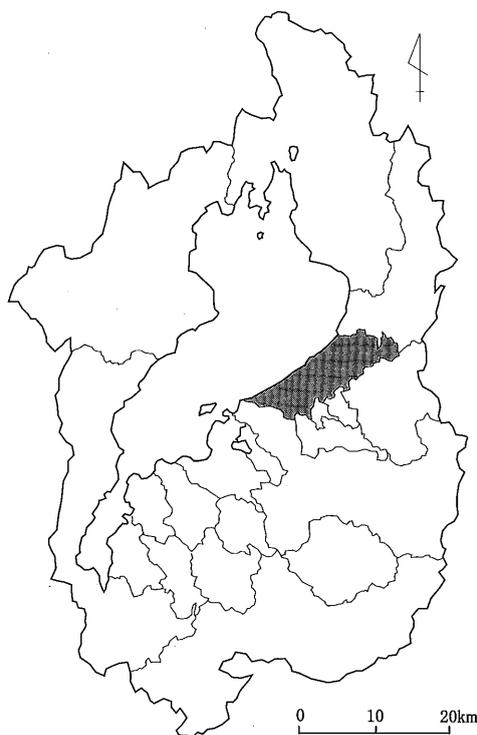
編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：近江印刷株式会社

THE TAKEGAHANA RUINED TEMPLE



March, 2010

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division